

これが私（たち）の流儀^{なりかた}です

樋口聡

十月初旬、カナダに行ってきた。五大湖の近くのロンドンという小都市にあるウエスタン・オンタリオ大学での学会に参加するためであるが、私の勤務する大学がちょうど秋の休暇中ということもあって、学会前少し余裕をもって出かけ、トロントに数日滞在した。

私が泊まったホテルのすぐ前に日本料理店があった。わざわざカナダにまで来て日本料理もないだろうと、そこにはなるべく近寄らないようにしていたが、トロント滞在の最後の晩、話の種にと寄ってみた。店先のショーウィンドウにはイミテーションの寿司やラーメンやらが飾ってあり、「本格的日本料理店！」などといった宣伝文句が英語で掲げられている。この蠟細工の陳列は確かに日本的である。寿司のサービス定食があるらしい。それを **Combo** と呼ぶのはハンバーガーと全く同じである。

店の構えは日本料理店らしくない。ビルを間借りしているのでそれは仕方がないのだろう。日本人の訪問客としては、むしろそのほうがありがたい。はるかなる外国で、何から何まで日本とおなじではやりきれないではないか。日本だったらおそらく自動ドアあたりを使うだろう入り口であるが、何の変哲もないドアを二つ押して中に入る。ドアが二つあるのだ。

なるほど日本料理店である。奥の方に座敷などもあって、かなり広い寿司屋である。店の外観からは想像がつかない。入ってすぐのところに私は立っていたが、たちまち違和感を持ってしまった。レストランに入ったら、まずウェイターやラウエイトレスやらがやってきて、人数は何人か、タバコは吸うか吸わないかを尋ねて席に案内してくれるというのが彼らの流儀であるが、ここでは一向にその気配がない。所在無く店の中を見回したりしていると、さすがにカウンターの向こうにいる男性が、「いらっしゃいませ」と日本語で声をかけてくれた。日本だったらマスターとか大将とか言ったりするのだろうか。しかし、そこで寿司をにぎっているその人は、ずいぶん若い人で、まるで学生みたいに見える。日本式に、店に足を入れたとたん「いらっしゃい！」と威勢のいいかけ声をくれるわけではない。

「ここ、いいですか」なんてぼそぼそと日本語で、それも何だか沈みこんだトーンで呟き、カウンターに座る。そしたら、これまた学生みたいに幼く見える女性が、メニューを持って注文を取りに来た。にぎり一人前を注文して、日本からの「輸入ビール」をすすり

ながらつき出しのあえ物あたりをつついて考えてみれば、確かにこれは日本式のやり方なのだ。店に入ったら、自分で空いている席を見つけ、好きなのところに座る。店の人もよほどのことがない限り、客の自由意志にまかせ、余計なことを語らない。なるほど日本での流儀はそれでいいのだが、ここはカナダである。大丈夫なのだろうかなどといらぬ心配を試みたら、新たに客が入ってきた。

若い紳士が一人、迷わずカウンターに座った。日本人ではない。会社帰りのビジネスマン風で、寿司屋で道草を食うあたり、なかなかの日本通かと思わせる。しかし、何となく落ち着かない様子だ。寿司を単品で頼もうとして、絵入りのメニューをいろいろと眺めている。寿司のねたを写真で説明したメニューである。これはなかなか親切だ。日本ではあまり見かけない。先ほども、日本人の年輩の女性が、おみやげにしたいのでそのメニューをゆずってくれとしきりに頼み込んでいた。

カウンターの紳士は、どうやら注文の中身を決めたようである。しかし、視線が落ち着かない。そわそわしているのだ。声をかけてほしいという様子である。「ちょっと、すみません」と誰かを呼べばいいのだが、そんな流儀までは与り知らぬらしい。刺身か何かをウェイターに注文し、あとはカウンターの向こうにいるマスターとやりとりすると言っている。当のマスターは気づいていても知らぬ顔、不親切な若者だ。私がいらいらしてみても仕方がないのだが、もっと声をかけてやったらどうなのだと内心憤慨していた。しかしながら、これもまた考えてみれば、きわめて日本的な流儀なのかもしれない。客が何かを言うまでこちらからごちゃごちゃ言ったりしない。日本だったらありふれた光景だろう。しかし、やはりここはカナダである。

店内にはほかに、日本人のグループが二つ、小宴会のようなことをやっている。「ちょっと、おねえさん」と呼び声がさかんとび、学生みtainなウエイトレスはもっぱらそちらに吸い寄せられる。小さなテーブルに一人の男性が座っているのだが、完全に無視されている感じである。その男はがっちりした体躯で、その椅子やテーブルが窮屈そうだ。東南アジアの出身であろうと思わせる浅黒い肌で、ぎょろりとした眼が、ときどき横の座敷の小宴会をにらみつけている。かなりの時間彼は口をへの字にしてじっと座っているだけなものだから、彼の注文は取ってあげたのだろうか少し不安になってきた。突然立ち上がって、小さなテーブルを大きな掌でバーンと叩き、「いい加減にしろ！」と大声で叫ぶのではないかと。そんなことは起こらなかったが、起こっても不思議ではないような雰囲気は彼の形相は示していた。

しばらくすると、奥の方から椀が一つ彼のテーブルに届けられた。どう見ても、あれは味噌汁か吸物である。お椀のふたを開けて、上手に箸を使って食べているが、がっちりした手にはその椀は不釣り合いに華奢である。その吸物らしきものだけを頼んだのだろうか。まさか。またまたしばらくの時間がたつ。その男性は、大きな体を小さなテーブルに押し込んで、殊勝に待ち続ける。そしてようやく出てきたのは、何とどんぶり物だった。日本だったら「吸物付きの親子丼」といったところのものである。吸物は、メインディッシュの前のスープ？だったのだ。

彼のテーブルの隣には、若い日本人女性の二人組がいる。こういった二人あるいは三人組の日本人の若い女性のグループが、いま、世界中を闊歩している。彼女らは、たいていの場合言葉が自由に使えないこともあって、しばしば当地の流儀の逸脱者である。それが無愛想な態度となって表れる。日本だったら完璧にその風景にとけ込んでいるレディたちは、ここでは嫌みな存在である。

「ちょっと、おねえさん」を連発していた宴会の初老の紳士が、赤ら顔をして、「このサービスはさすがトロントだねえ。さすがだねえ」などと管を巻きだしたので、私は嫌な思いをしながらその店をそそくさと出た。冷え冷えとしたサービスにもかかわらず、思わずチップを置いてきてしまった。それにしても、その寿司はうまかった。日本ではなかなかありつけない「脂身のまぐろ」が並寿司にも入っているのだ。それを「とろ」と呼んで畏怖するのが私たちのこれまでの流儀である。

カナダのサンクスギビングはアメリカよりもひと月早い。地理的な理由による収穫期の差のせいだ。幸運にも十月十日の感謝祭のディナーをご馳走になった。伝統的な家庭料理である。私が訪ねたその家には若者が多く集まった。私の学生と同じ世代の彼ら彼女らに混じって、私もいろいろな話をした。トロントの寿司屋のことも話してやった。しかし、私のところはどこか虚ろだった。はしゃぐのは少し止めて、静かに音楽でも聞いていたかった。まるで、あの寿司屋の東南アジアからの彼のような気分だった。ふと、私をこのディナーに誘った友人と目が合った。「どうしたのだ。沈み込んでいないで、また会話に加われよ」とでも言いたげだった。彼がもしそんな風に声をかけてきたら、「大丈夫。気にしないで。これが私の流儀です」(It's OK. Don't mind. This is my way.) と答えようところの中で眩いていた。

【付記】 このエッセイは、『不死鳥』第 34 号、1995 年に掲載されたものである。